

文部科学大臣 萩生田光一 様

文化庁長官 宮田亮平 様

作曲家の鶴見幸代と申します。あいちトリエンナーレへの補助金不交付決定につきまして屈辱的な思いを持ち、これ以上平和を脅かす事態にははいけない切実な思いでお手紙を書いています。

私は、沖縄アーツカウンシルのプログラム・オフィサーとして、沖縄県内の文化芸術団体に補助金交付と文化芸術振興の支援業務をしていたことがあります。文化芸術活動が政治情勢や時の権力に左右されないものとして、専門家集団のアーツカウンシルが設置されました。文化政策の有識者による審査により支援事業が採択され、交付決定後に採択事業が開始された後でも事業遂行に疑義が生じたらば、支援を継続するかどうかを審査員に諮ることを怠ることはありませんでした。沖縄では、基地問題に関して、政府の理不尽な決定により、ああまたかと、まだ私たちは戦中にいる、というようなあきらめのような悔しい思いが何度も重なっている中で、人々の暮らしの支えとなっている文化事業においても、理不尽なプロセスで不交付が決められてしまったことに、本当に悔しくてたまりません。政府による言語、言論、表現や思想の規制・統制のせいで、軍人も一般の人も多くの人々が戦争で亡くなりました。沖縄では、二度と同じことが起こらないように、この辛い経験を忘れないための取り組みは多方面でされており、戦争経験者がかなり少なくなっている今、戦争を体験してない世代でも、自分ごととして身近になっていますが、とても心配しているのが、沖縄を離れると、戦前戦中にあったことが他人事となっている人が多いと感じる事です。近代日本史をまともに教わらないことも原因にあると思います。文化や芸術や思想が規制されてしまったら人が死ぬことに繋がってしまう。健康で文化的な最低限度の生活を営む権利さえも奪われてしまう。そうならないために、先の大戦の反省から作られた、表現の自由、差別されない権利のための文化政策の仕組み、決定のプロセスをなにがなんでも壊さずに死守してください。

作曲家として、これまで文化庁関連の業務に携わったことは何度もあります。現在は、文化庁委託事業で、音楽経験や芸術家・文化芸術関係者との交流を通し、子ども達が多様で豊かな将来を描くことができるための素晴らしい取り組みのため、誇りをもって関わっております。今後、子ども達が自由に自らを表現できる機会が理不尽に奪われることがあってはいけません。

また私は、東京芸術大学出身で、非常勤講師も務めていたことがあります。相撲好きの私は、宮田長官が学長だったころ、「学長と語ろうコンサート」で、相撲とオーケストラを融合させた、大変ユニークなコンサートを開催されたことが、今の私の作曲活動に大きく影響をもたらしております。また同時に、横綱審議委員でもあることに敬意を表します。現在の政権では心配ないと思いますが、もしも大きく政権が交代したときに、ことごとく日本中からあらゆる相撲行事が理不尽に禁止される、という事態もおきかねません。

今回の理不尽な補助金不交付決定は、契機となった、あいちトリエンナーレの「表現の不自由展・その後」を中止させた「平和の少女像」などに対する脅迫行為に追い打ちをかける、国からの脅し・恫喝として、作曲家の私は受け止めています。文化庁に対して、テロリストに対するような決意を抱くことは大変残念ですが、私のこれからの表現はこの脅しに屈することはありません。

作曲家 鶴見幸代

2019年10月4日